

中
小
習
字
帖

卷
下

K220.72

24a

3

K220.72

24a

3

凡例

- 一本書は中等教科の學校に於ける習字科の教科書に充てむが為に編纂したるものなり。
- 一本書は上中下の三冊を以て完結し上中には楷書行書體を下には行書草書を收めたり。
- 一本書はその材料を現今中等教科の學校にてあまねく行はるる國語讀本漢文讀本の上に取よりて以てその讀書科との聯絡を保たむことをはかりたり。
- 一本書は學生をして字体運筆の要を悟らしめて書法に習熟せしめむことをつとめたり共にもまたこの書によりて格言詩歌の趣を味はしめなほまた日常須知の文字と事項とに曉通せしめむことを期したり。
- 一草体の文字には傍に楷書を添へて對照するに便ならしめたり。
- 一各冊の紙數を四十頁つとし隔週に一回清書をなせしめ以て學年間に一冊を終らしめむことを期したり。

文學士海弘藏編

中
小
習字帖 卷下

愛石玉木本三郎書

言不足行有餘為貴。

今日思之明日言之。

事必有志而後可成。

下二

志前加勵而後不怠。

よろづも、手はよく書か
まほしきわざなり。歌よみ、學

間などする人は、殊に、手あし
くしては、心、方りのせらるゝ

をそれながらかは若しからむ
とらふも一わたり理ほさる

下四

ことながら猶あがずうちあ
ほぬうちぞする。 本居宣長

花慢蔽地、恍疑無路。

下五

淡紅濃白、隨步媚人。

日にほし暑きまじびしくなりぬ。皆々様つゝあど汚
過しあそぼそれゆゑ、個ひ上げぬ。私方一同無

事くらし居りぬ。間汚安ん下されたくぬ。汚間
暇のそりちと汚でかけ下されたく、待ち上げぬ。

王。主。永。水。各。冬。文。交。
王。主。各。各。各。冬。文。交。

王。主。永。水。各。冬。文。交。

人。夫。更。世。老。左。夏。度。
人。夫。更。世。老。左。夏。度。

人。夫。更。世。老。左。夏。度。

住。佐。伍。梅。櫻。桃。李。季。
住。佐。伍。梅。櫻。桃。李。季。

行。後。淺。深。河。歸。婦。妙。

行。後。淺。深。河。歸。婦。妙。

願。賴。欲。歌。達。進。遠。近。

願。賴。欲。歌。達。進。遠。近。

來。成。幾。歲。謝。語。談。識。

來。成。幾。歲。謝。語。談。識。

實。察。忠。恕。縲。織。起。赴。

實。察。忠。恕。縲。織。起。赴。

會。合。挨。拶。吹。吠。親。新。

會。合。挨。拶。吹。吠。親。新。

少年の光学雑感。

下
十

一寸光陰ふりの程。

未足池塘春草夢。

下
三

階前梧葉已秋聲。

出。卷。之。三。蛇。足。推。教。

世下

管。見。酌。愛。解。頤。莫。逆。

桃李不言，下自成蹊。

下
田

寧為鶉口，毋為牛後。

人の性切、雖も新垣、名有り長。と人我趣、
美、爲り人、を短、而不見、其、在、分、時、白、の、同

を。人の性、念、を、在、分、時、白、の、同、
文、趣、の、也。

世範

雨。霰。電。尚。裳。影。形。彰。

雨。霰。電。尚。裳。影。形。彰。

金。銀。銅。助。勤。勉。報。執。

金。銀。銅。助。勤。勉。報。執。

耽聽。問。閑。闌。攻。改。放。
耽聽。問。閑。闌。攻。改。放。

耽聽。問。閑。闌。攻。改。放。

几。軌。帆。幅。秩。稅。熾。燐。
几。軌。帆。幅。秩。稅。熾。燐。

几。軌。帆。幅。秩。稅。熾。燐。

雪擁山臺樹影涼。

下六

檐前山勢秋沈之。

采收家帙里終義。

下九

一種青煙美古心。

深山木のその梢とも思ふべきなり。

桜は花にあらはれにけり。

1220.7

石法西生新海島之音
吉岡平助



下世

明治三十九年十一月一日印刷
明治三十九年十一月五日發行
明治四十年一月一日訂正再版印刷
明治四十年一月五日訂正再版發行

定價各金貳拾三錢

編纂者 内海弘藏

發行兼印刷者

東京市日本橋區本石町三丁目七番地

揮毫者 玉木本三郎

發行者

大阪市東區備後町四丁目七番地
大葉久吉
吉岡平助

發行所

東京市日本橋區本石町三丁目
大阪市東區備後町四丁目

寶文館

